

アメリカ留学日記 (3)

～ 秋学期 終了～

早稲田大学理工学部 3 年・University of Oregon に留学中

堀 真知子



オレゴンに来て、信じられませんが、もう、三ヶ月が経過しました。この間、私は今までで最大の困難にぶちあたりました。ここで、私は大きく成長しました。私になにが起こったのかをありのままにつづりたいと思います。

1, culture shock

こちらに来てから、私はカルチャーショックをまず味わいました。習慣の違いや日本人ならしないようなアメリカ人の表情の豊かさなど戸惑いを隠せませんでした。ほかの日本人の人と比べるのはよくないとわかっていても、なにかと自分はどうみられているのかなど、すごく気になってしまいます。

特にこちらに来てから一ヶ月ほどたったときから、そのショックは、私のすべての生活を支配していきました。ここはアメリカなのだから、自分もアメリカナイズされさせようがんばってみましたが、それはアメリカの食生活だけでした。

ありとあらゆるものが、私の住むオレゴン州は no sales tax (消費税ゼロ) なので、本当に安く感じます。そして、毎日お米を食べています。

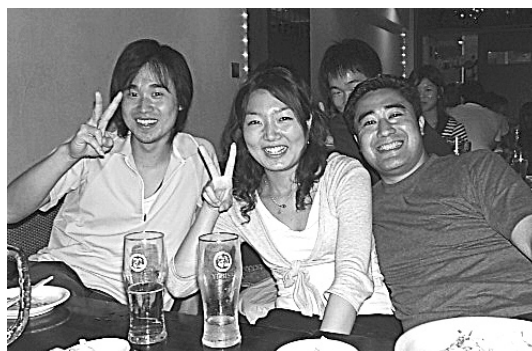
そんな毎日の中で思うことはバスに乗ってもアメリカ人。私一人だけが、日本人という状況が珍しくありません。そんな、日本人のいない空間、つまりホストファミリーの家がだんだんと恐くなっていきました。

この国の母国語は日本語ではないから当たり前だと、自分で自分の状況を解決しようとしたのですが、家に帰ると症状はひどくなっていきました。その後一ヶ月間くらいの間、私はずっと日本人とだけ過ごし、キャンパスで英語を使わないように、努めてそうしていました。

いつからかはわからないのですが、英語を受け入れる耳が私には残されていなかったようです。日本語以外の言語が私に聞こえてくるだけでぞっとしてしまいました。ひどいときには、ただひとりであるだけで本当に恐くなっていきました。

そのような状況に陥ってしまったらもう仕方がないので、ウィークデイズに楽しむことを楽しもうと、勉強はさておき、早稲田の同じグループの友達とばかり遊び、極力アメリカ人とのかかわりを避けるような行動パターンが身についていきました。そんなことがいけないとわかってはいても、カルチャーの違いは、私にとってものすごくストレスを感じるものでした。ずっと英語を話したいと思って留学したのに、一体いま自分の目標が何なのかを痛感し、何度も自己嫌悪に陥りました。

そんななかで、私のホストファミリーは快くそんな状況にある私のことを迎え入れてくれました。特に週末は、学校もお休みになっているため、私が暇にしていようものならいつもどこかに行ってくれ、「リフレッシュが必要なよ」とこちらの人なりの最大限の心くばりを、私にしてくださいました。



留学前：東京にて、先生・友人と